

年明け穫り業務用キャベツの生産安定を図り定時定量出荷を実現する技術			
【要約】 在ほ性が良好な品種‘夢ごろも’を用いて 8/25 頃および 9/5 頃の定植を組み合わせることで、12 月下旬から 4 月上旬にかけて、常時収穫可能な状態を維持できる。また底面給水育苗の場合は、育苗期間が延びても苗質が劣化せず、収量への影響がない。			
農業技術振興センター・栽培研究部・野菜係		【実施期間】	平成 26 年度～平成 28 年度
【部会】	農産	【分野】	戦略的な生産振興
【予算区分】		県単/国補	【成果分類】
			指導

【背景・ねらい】

1～2 月の収穫をねらったキャベツ栽培では、気象による収穫時期や収量の変動が大きく、業務用で重視される定時定量出荷に支障をきたすことが多い。そこで、在ほ性が高い品種を用いて収穫可能な状態を長期間維持する技術や、降雨による定植作業の遅延に対応しやすい育苗技術等により、収穫時期や収量の安定を図る栽培体系を開発する。

【成果の内容・特徴】

- ① 気象が収穫時期におよぼす影響を小さくするため、早期（8 月 25 日頃）に定植して生育量を確保しておき、その後は在ほ性を利用して収穫を待つ手法を取った場合、品種‘夢ごろも’は、他品種に比べて 1 月末～2 月末の球重や可販率が優れる（図 1・2）。
- ② ‘夢ごろも’は、8 月 24 日の定植では 12 月下旬から 3 月中旬の間、9 月 6 日の定植では 2 月下旬から 4 月上旬の間、収穫が可能である。これら 2 つの作型を組み合わせると、12 月下旬から 4 月上旬の間、常時収穫可能な状態を維持できる（図 3）。
- ③ 1～2 月穫りの場合、本ほ定植後に追肥を通常 3 回施用し、最終追肥時期を 12 月上旬頃としているが、最終追肥時期を 10 月下旬に早めると収穫時の球重が増加する（図 4）。
- ④ 育苗中に追肥を施用せず底面給水により育苗した場合、育苗期間が通常よりも長く 50 日程度となった苗を定植しても収量への悪影響はない（図 5）。

【成果の活用面・留意点】

- ① 常時収穫可能な状態を安定して長期間維持できるので、状況に応じて出荷量を弾力的に調整でき、定時定量出荷を実現しやすい。
また、日々の収穫作業量の繁閑の差を低減し平準化できるので、労働力の有効活用につながる。さらに、生産者の保有する労働力を元に、無理のない作付面積の設定や作業計画の立案が可能となる。
- ② 最終追肥時期を 10 月下旬に早める場合でも、1 回目の追肥（定植 2 週間後）および 2 回目（結球始期）は従来通りの時期に施用する。
- ③ 底面給水育苗（育苗期間中無追肥）であっても、キャベツ苗の定植時期が遅れると収穫時期は遅れる。品種に適した定植時期を逸すると結球しない場合があるので注意する。

[具体的データ]

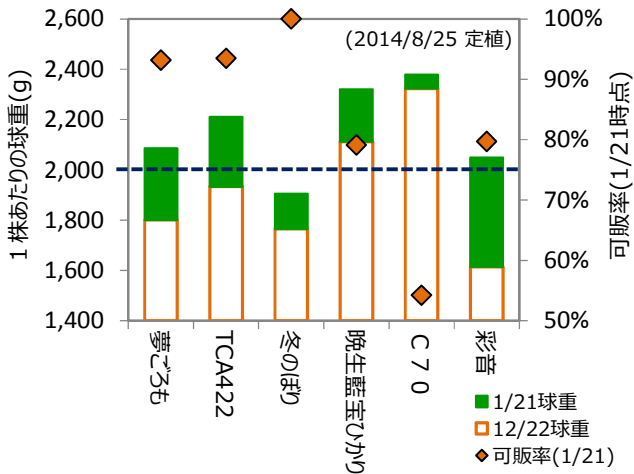


図1 1月末の球重と可販率の品種比較(2014年度)
可販率:腐敗、裂球、重量超過(3000g/株以上)等を除いた株率

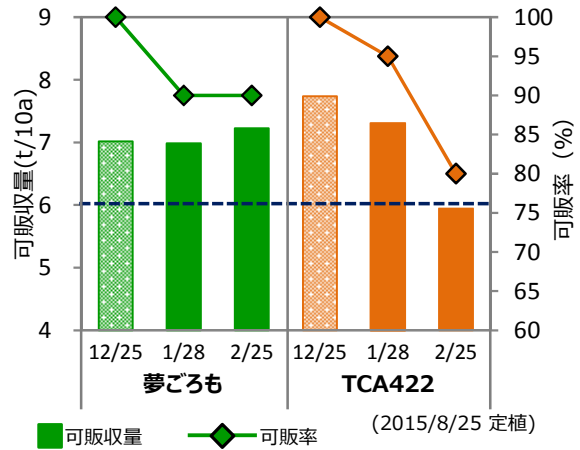


図2 1月末～2月末の可販収量と可販率(2015年度)
可販収量:栽植密度(3800株/10a)×
平均球重×可販率

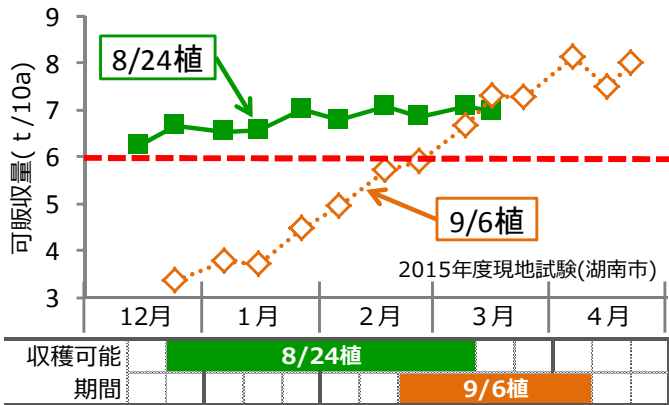


図3 品種‘夢ごころも’の可販収量の推移と収穫可能期間
(2015年度)
収穫可能期間:可販収量 6t/10a を超える期間と定義した

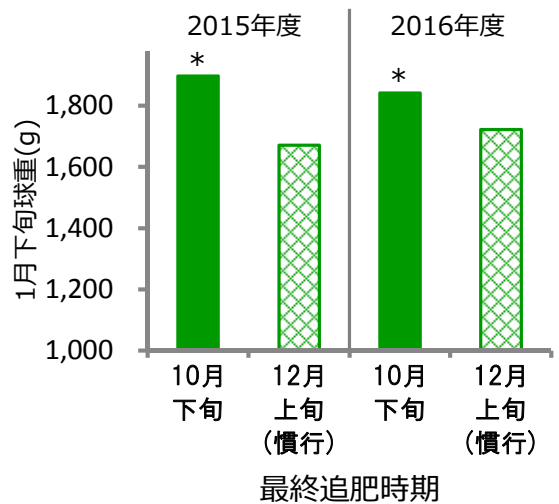


図4 最終追肥時期が収穫時の球重
におよぼす影響
追肥 1回あたりN量:4.8kg/10a
品種:夢ごころも 定植日:8/25
図中の*は最終追肥時期を要因とする
分散分析の結果を表す(0.05>p)。

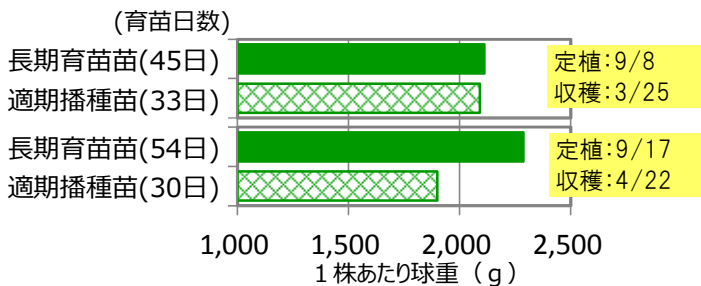


図5 底面給水苗の育苗期間延長が収穫時の球重に及ぼす影響
(2014年度) 品種:夢ごころも 育苗期間中の追肥なし

[その他]

・研究課題名

大課題名:戦略的な農畜水産物の生産振興に関する研究

中課題名:地域特性に応じた戦略作物の本作化による水田のフル活用

小課題名:田畑輪換栽培体系における麦・大豆・野菜の安定生産技術の確立 ほか

・研究担当者名:山下悟 (H26～H28)、北澤健 (H26～H28)、芦田安代 (H26～H28)

・その他特記事項:

- ・本成果は、農研機構生研センターが実施する「攻めの農林水産業の実現に向けた革新的技術緊急展開事業(うち産学の英知を結集した革新的な技術体系の確立)」の助成を受けて実施した成果を含む。
- ・本成果の一部は滋賀県園芸振興大会(H28)や東海地域マッチングフォーラム(H28)他で発表。